

中高につながる小学校英語の取り組み実践例

—英語教育の中で小学校英語の果たす役割から考える—

伊藤文江

抄録：

小学校・中学校・高等学校と進むにつれて英語科で取り扱う内容は質・量ともに飛躍的に高く、多くなる。それぞれの段階でどのような力をつけておくことが求められているのだろうか。現場での経験をもとに考察した。そしてそのような力をつけるためにはどんな取り組みができるか、小学校英語に焦点を絞り、『聞く』『話す』『読む』『書く』の領域別に実践例を挙げながら考えた。

キーワード： 自己表現 動機づけ アクティブ・ラーニング

1. はじめに

筆者は大学卒業後、中学校で英語教師として勤務し始めたが、その後、期せずして高校、小学校と異なる現場を渡り歩きながら英語教育に携わることとなった。現場をかかわるたびに戸惑い、試行錯誤を繰り返しながら、よりよい授業を模索してきた。その間に社会全体も英語教育を取り巻く環境も大きく変化していった。この経験を通して、英語教育の中で小学校英語はどのような役割を担うのか、またその役割を果たすためにはどのような取り組みができるのか、実践例を通して考えてみたい。

2. 小・中・高の英語教育の現場で

○中学校英語教師として (1983 ~ 1987)

新任教師として中学校に赴任した 1980 年代、日本はまさに高度経済成長の真っただ中であった。多くのバックパッカーたちが海外を目指したのもこのころである。何もかもに勢いがあった。しかしそんな中、英語の授業は自分が生徒であったころとさほど変わらず、旧態依然の感があった。もちろん従来の文法の説明やパターン・プラクティスも基礎を作るのに重要である。しかし、それだけでは足りないと考えた。若手教師を中心に、英語を『生きたことば』として使えるように子どもたちに教えていきたい、と話し合った。こうした仲間と教材や指導方法について情報交換しながら授業を組み立てていった。英語を学問や教養として教え、知識を与えるだけではなく、子どもたちが自分自身を表現する

手段となるようにしたい。『自己表現』をキーワードに様々な活動に取り組んだ。中学校 1 年生の初期に出てくる I have という単純な文すら、自分がとても大切にしているもの、自慢できるもの、珍しいものなどを絵にしたり、場合によっては実物を持ってきたりして、他の生徒たちの前で I have と発表するのはちょっと気持ちのたかぶる授業である。聞くほうも興味津々である。

また、授業にポップソングもよく利用した。当時、廊下で器用にブレイクダンスを踊る生徒やマイケルジャクソンをまねてムーン・ウォークを練習する生徒もいた。ふだんあまり授業に前向きでない生徒たちも、そのころ流行していた曲の歌詞を一緒に読み解いたり、歌ったりする授業では目を輝かせて参加していた。これも生徒たちにとって『生きた英語』である。実際にそのとき流行している曲に使われている英語だから、鮮度が違う。本当にこういうふうに言うんだ、と感心する子もいた。大好きなカルチャー・クラブに辞書を引き引き、ファン・レターを書いた子もいた。ちょうどこの頃、アフリカが大飢饉に襲われて、これを救おうと立ち上がったアーティストたちが作った “Do they know it's Christmas?” や “We are the world” は教室でレコードを聴きながら勉強した。(今ならレコードって何? から始めなければならぬところだが) 多くのアーティストの中から声を聴き分けて「今のはスティーヴィー・ワンダーや」「これはシンディー・ローパー」と逐一解説してくれる強者もいて、大変驚いたものだ。興味関心がある、ということは最強

の動機づけであると思った。

○高校英語教師として (1993 ~ 1997)

高校で教えることになった1990年代は、グローバリゼーションが盛んに言われるようになった時期と重なる。経済問題にしても環境問題にしても地球規模で考えて取り組まなければ解決できないという認識が広まったのである。

この時期、戸惑いながら高校で教え始めたことを覚えている。自分が受けた文法中心、訳読中心の授業しか経験がないので、どのように授業を組み立てればよいのか試行錯誤の連続だった。ただ、教える側として高校の英語の学習内容をあらためて見てみると、文法的な基礎は中学校でかなり網羅されていて、全く新しく学ぶ内容はそう多くはないことに気づいた。過去完了などの時制に関するものと分詞構文や仮定法くらいではないか。もちろん取り扱う語彙は中学校とは比べものにならないほど爆発的に増えるし、中学校で基本だけ押さえた内容を深く広く学ぶことになる。中学校でしっかり基礎をつくっておくことは本当に重要であると再確認した。

ちょうどこの時期に高校でオーラル・コミュニケーションが導入された。英語科教員とALTで相談しながらプレゼンテーションやディベートを取り入れた授業を試みた。いずれも十分な準備があって初めて成り立つ授業である。死刑制度の是非、などというテーマのディベートであれば、世界的な現状や犯罪の発生率との関係、過去の事例、倫理的問題など幅広くリサーチする必要が出てくる。日本語でおこなったとしてもかなり高度なテーマである。英語力だけでなく、情報収集力や分析力など様々な力が求められる。この準備は高校生にとってなかなか大変な作業であるが、受け身でいることは許されない。発達段階からすれば、知的好奇心を刺激する適切な内容なのではないか。自分の考えや意見をまとめ、説得力のあることばで述べられるということ、またそれ以前に、常に幅広く社会問題などに目を向け、自分の考えや意見をしっかり持つことが求められる。

また、内容こそ少し高度になるが、中学校でこだわった「自己表現」を高校でも取り入れた。仮定法の授業のあとで自分自身の『現在の願望』や『過去の後悔』を英作文してもらった。そこは高校生で、If I had got up a little earlier, I would have been in time for school. とか If I had

confessed my love for her at that time, she might have been my girlfriend. というような巧みな英文を作ってくる。生徒全員の英作文を匿名でプリントにして配布したら大盛り上がりした。他ならぬクラスメイトの書いた文である、ということが大事なのだ。日本語では書けないことも、英語でなら少し距離を置いて客観的に書けたりする、というのも面白い。

高校を離れた後、2000年代に入ると大学入試センター試験で英語のリスニングが導入されるようになった。これも『読み・書き』の能力だけでなく、コミュニケーション能力が求められるようになったことを反映している。高校の英語の授業を英語で行う、ということも求められるようになった。2020年度からは大学入試センター試験が大学入試共通テストへ移行し、『話す』能力についても民間の英語試験を利用してはかれることになった。(民間試験は利用しないと決めた大学もあるが) 経済界からも「使える英語」への期待が大きくなっているのであろう。

○小中連携英語講師として (2006 ~ 2014)

その後インターバルを置いて、小学生に英語を教えることになった。そのころ長浜市では全国に先駆けて小学校で英語の授業を始めていた(NESEP: Nagahama Elementary School English Program)。小学校1・2年生は週1時間、3・4年生は週1.5時間、5・6年生は週2時間英語を学んでいた。たくさんのALTを招き、各学年のカリキュラムもできていた。ただ小学校で楽しく英語を学んでも、中学校に入ると小学校とのギャップから、つまづいてしまう子どもたちもいる。そこで、子どもたちが抵抗なく中学校の英語の授業に入っていけるように、ということで、小中連携英語講師として小学生に英語を教えることになった。一年目は筆者を含め3人のJTE(Japanese Teacher of English)が旧市内の6つの小学校で教える形でスタートしたが、2年目からは10名前後のJTEが市内の全小学校に配置された。中学校や高校で英語を教えていた者、民間の塾で幼児英語や児童英語に携わっていた者、留学経験を生かしたいと考えていた者などさまざまである。この約10名のJTEたちは何らかの形で英語に関わってきてはいるものの、小学校で英語を教えるのは皆初めてであった。市内の各学校にALTが配置されているのは心強かった。このころカリキュラムは

あったが、まだ教科書がなく、ゼロから授業を組み立てなければならなかった。このような活動をしてみたらどうかとか、こんな教材を作ってみたとか、こんなふうに説明したらわかりやすいのではないとか、知恵を出し合い、情報交換をし、みんなで試行錯誤を繰り返した。教師個人の裁量に任せられる部分が多く、自由な発想で様々な活動ができるが、そのぶん準備も大変である。アイデア豊富な JTE 仲間と『生きた教科書』の ALT たちに助けられて、小学校の現場は本当に楽しかった。年度末のアンケートでも毎年 9 割以上の子どもたちが「英語の授業は楽しい」と答えた。どうかこれが中学校、高校へとつながっていきますように、と祈りながら卒業生を送り出した。

このように長浜市では英語特区として先進的に小学校で英語教育に取り組んでいたが、全国的には 2002 年から新設された総合的な学習の時間に国際理解教育の一環として徐々に英語の授業が取り入れられるようになった。その後 2006 年から小学校 5・6 年生で外国語活動が始まった。学習指導要領の改訂で 2020 年からは小学校 3・4 年生で週 1 時間の外国語活動が、小学校 5・6 年生で週 2 時間の外国語が必修となる。

外国語学習は早く始めればそれだけ効果が上がる、というほど単純なものでもない。むしろ早くから英語嫌いをつくってしまう危険性すらある。小学校英語に対しては「英語教育よりも日本語教育を充実すべきだ」「小学英语を行っても、大きな成果は見込めない。むしろ弊害がある」

「小学校で英語教育を行う準備が十分ではない」などの反対意見が根強くあったことも銘記しておかなければならない。（『危うし！小学校英語』鳥飼久美子 文春新書）もうすでに走り出してしまったのだから、こういった憂慮を顧みる必要はない、ということではないだろう。これらが杞憂に終わるような成果を出していくべく、真摯に小学校英語に取り組んでいかなければならない。

3. 英語教育における小・中・高の役割

これまでの経験をもとに、英語教育における小学校・中学校・高校のそれぞれの役割とは何かについて考えてみた。

○小学校英語の果たす役割

小学校では、外国語活動や外国語の授業を通して、まず子

どもたちが英語学習の門をくぐることができるようにすること。そして英語を使ってコミュニケーションできることの楽しさを教え、しっかりと動機づけをすることではないか。どの教科でもそうだが、入り口を前にして、そこから先へ進むことができず、その教科の面白さを味わうことがないまま終わってしまうのは本当に残念なことである。門をくぐって先へ進んで行けるように、いろいろな工夫をしながら導いていくことが大切である。小学校英語を通じて英語の音声、リズム、イントネーション、文の構造などを感覚的に理解できるようにしたい。また、中学校・高校へとつながっていく英語学習へのしっかりと動機づけをしておくことも大変重要である。

よく、小学校では楽しく外国語活動をして「英語が好き」と答えていた児童が、中学に入ると文法などの知識偏重の英語の授業に直面して英語嫌いになってしまう、というような話を聞くが、これは本当に中学校側だけの問題だろうか。確かに中学校に入学してくる子どもたちは以前とは異なり、すでに小学校で英語の授業を経験している。その実態を知らずに、中学校でこれまで通りの授業をしては、子どもたちはついてこないかもしれない。小中で情報交換をして、しっかり連携をしていく必要がある。同時に、小学校側にも問題があるかもしれない。つまり、小学校でしっかりと英語学習への動機づけができていなかったのではないかと、ということである。ゲームを取り入れたりあの手この手で楽しく学べるように工夫したりしていても、本当の意味でコミュニケーションの楽しさを実感できるような授業ができていなかったのかもしれない。自分の言いたいことが英語で言えた！相手の言っていることが分かった！通じ合えた！という本来のコミュニケーションそのものの楽しさを実感できるような機会を与える、ということが重要なのではないかと。なんだかワイワイとゲームをして楽しかったけど、結局何を勉強したんだっけ？というようなことになっては本末転倒である。ゲームなどの活動はあくまでターゲットとなる言語材料を練習し、習得するための手段である。

子どもたちが英語学習の門をくぐり、しっかりと動機を持って、次の中学校・高校での学習に主体的に向かっているようにするのが小学校英語の役割なのではないか。

○中学校英語の果たす役割

では英語教育における中学校での役割とは何か。英語学習に無事入門した子どもたちが、その意欲を持続できるように、中学校でも英語をコミュニケーション・ツールとして生かす体験的な学習の機会は引き続き取り入れたい。またそれと同時に、小学校では英語の表現をまるごとそのまま理解していたが、これに文法という後ろ盾を与えて、体系的に理解できるようにするのは重要なステップである。先に述べたように、高校で学ぶ文法事項のかなりの部分は、中学校でその基礎が網羅されている。中学校でしっかりこれを学んでおくことが、高校での質・量の飛躍的な変化に対応する力となる。母国語を習得する過程とは異なり、文法が近道を教えてくれる。やたら文法を悪者扱いする向きがあるが、文法なくしてはひとつひとつ経験的にルールを学んでいかなければならない。それではとても時間が足りない。誰もが留学したり、インターナショナル・スクールへ通ったりして英語を学べるのであれば別だが、ここは文法の力を借りて効率的に学んでいくほかあるまい。

○高校英語の果たす役割

さらに高校では何が求められているのか。先に述べたプレゼンテーションやディベートは、生徒の総合的な力が問われる活動である。自分の意見や思いを英語でしっかり伝えられること。相手の意見や思いをしっかり受け止めて理解できること。小学校や中学校で積み上げてきた基礎は、こういったことができるようになるためのものであったのではないか。高校生くらいになると、使える英語のレベルが知的レベルに追いついてくる。ここまでつないできた意欲が、確かな英語力として結実するように、適切な課題や場面を与えていきたい。

またこの段階では、「教養」としての英語も重要なのではないかと思っている。例えば、「プライバシー」ということが日本に入ってきたとき、これに当たる日本語がなかったため、翻訳することができなかった、というような話は文化の違いを如実に物語っていて興味深い。プライバシーという概念がなかったから、当然それにあたる日本語もなかったわけである。また、シェイクスピアなどの古典文学を読んでも、現代に通じる示唆に富んだことばをあちこちに発見する。これらの例は「教養」の部類に属し、知らなく

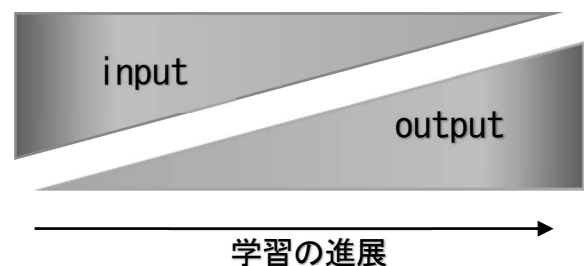
ても特段不便はないだろう。しかし、ことばは文化的背景や歴史的背景から切り離しては成り立たない。様々なことに興味関心を持ち、幅広い知識や「話す内容」を持った英語学習者となれるように、「教養」の部分も大切にしたい。

4. 小学校英語における領域別の実践例

3. で述べた小学校英語の果たす役割を踏まえ、具体的にはどのような活動ができるのか、また、注意すべき点は何か、実践例を挙げながら考えてみた。

○『聞く』力をのばす取り組み

当然ではあるが、外国語学習はすでに母国語という一つの言語を自分の中に持っているから、母国語を習得する過程と全く同じではない。しかし多くのインプットがあつて初めてアウトプットができる、という点では同じである。つまり「話す」ことができるようになるためには、たくさん「聞く」必要がある。幼児に繰り返し同じ話を読み聞かしていると、そのうち幼児がまるで文字を読んでいるのかと思うほど、すらすらとその話をそらんじるようになって驚かされる、という経験をした人は少なくないだろう。多くのインプットがアウトプットをもたらしたのである。どのような表現を扱うにしても、学習の初期には意識的に多くのインプットを与える必要がある。下図のようなイメージである。



もちろんどつぷりと英語に浸って学ぶ immersion の環境が用意できれば最も効率的にインプットができるのだろうが、週1時間か2時間の授業ではそのような環境は望むべくもない。ここは、母国語を介することを弱みではなく強みであると考え、効率的にインプットを行うようにすればよいのではないか。教室英語や HRT(Homeroom Teacher)と ALT の会話など、意識的に多くの英語を聞かせることは大切である。しかし、ただ量が多いだけでなく、質にも気を付

けなければならない。子どもたちにわかりやすいように、ことばを選ぶ必要がある。場合によっては少しの日本語が助けになることもあるだろう。また学習者がそのインプットを漫然と聞くのではなく、集中的に聞けるような工夫も必要である。いくつか例を挙げてみる。

〔例① 暗号解読クイズ〕

〔例② フォニックス・ツリー〕

たとえば〔例①〕ではアルファベットの聞き取りにクイズの要素を取り入れて、楽しみながら正確な聞き取りができるように工夫している。〔例②〕ではフォニックスで a と u の聴き分けにチャレンジするが、しっかり聞かないと目的地にたどり着けない。単語レベルの聞き取りではカルタやキーワードゲームを使うと、子どもたちの意識を集中させることができるし、何度も単語を繰り返すため、多くのイン

プットを与えることができる。

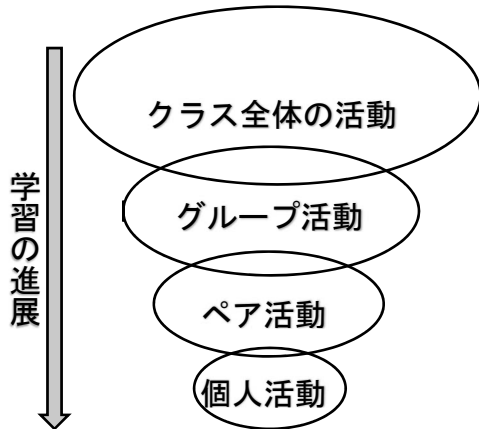
このように聞き取りにクイズ性やゲーム性を取り入れることも楽しんで活動できるための一つのヒントであるが、高学年になってある程度まとまった内容を取り扱えるようになれば、事前に聞き取りのポイントを提示してリスニングをさせるとよい。そうすればただ漫然と聞くのではなく、意識を集中して聞くことができる。何回か聞きたびに異なる聞き取りポイントを提示して、最終的に全体の内容が理解できるように持っていきたい。そして聞き取りができること、理解できることそのものを楽しめるようにしたい。

英語の絵本や歌の活用も大変有効である。Brown Bear, Brown Bear, What Do You See? (Bill Martin Jr./Eric Carle)は児童英語でよく使われている絵本であるが、単語の繰り返しが多く、リズム感があって、子どもたちがなじみやすい。なによりも本物の英語である。ALT が教えてくれた絵本に Chicken Soup with Rice -A Book of Months- (Maurice Sendak) というものもある。アメリカやカナダの小さい子どもがよく読むそうだ。これもリズム感があり、フレーズの繰り返しが面白い絵本である。小学校で詩の暗唱に取り組んでいるところは多いと思う。勤務していた小学校でも、子どもたちが驚くほどの記憶力で詩を覚え、それをみんなの前で朗々とテンポよく、力強く暗唱するのを聞いたことがある。児童クラブでは百人一首がブームとなり、子どもたちがあの独特の抑揚で百人一首をそらんじていた。ことばの持つ響きやリズムに子どもたちは敏感である。それは英語でも同じなのではないか。ハードルが高いと思うようなものでも、子どもたちは案外やすやすと乗り越えていく。細かな表現や文法にこだわらず、文章をそのまま楽しんでいる。やはり本物の持つ力なのだと思う。高学年ならば I'll Always Love You (Hans Wilhelm) や The Giving Tree (Shel Silverstein) など、ある程度内容を伴った、大人でも楽しめる絵本を取り上げてよいかもしれない。

○『話す』力をのばす取り組み

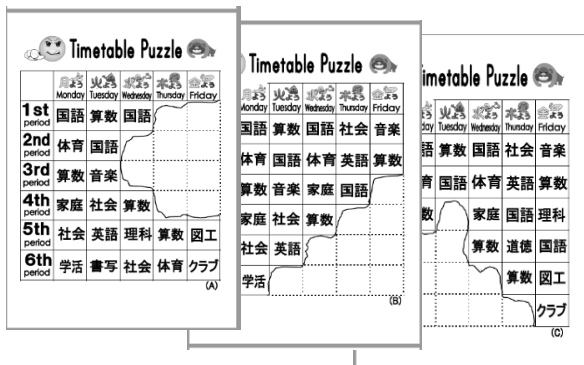
多くのインプットを与えたら、それを今度はアウトプットできるようにしていかなければならない。『聞く』から『話す』へと進めていくわけだが、能動的に発話する、という活動は『聞く』よりも少しハードルの高い領域である。まずクラス全体で単語や基本文などを繰り返し練習する活動から

始め、仲間と助け合いながらグループでの活動やペアワークをし、それから個人の活動へと進めて、最終的にターゲットとなる表現をひとりひとりの子どもが自信をもって自在に扱えるようにしていきたい。下図のようなイメージである。

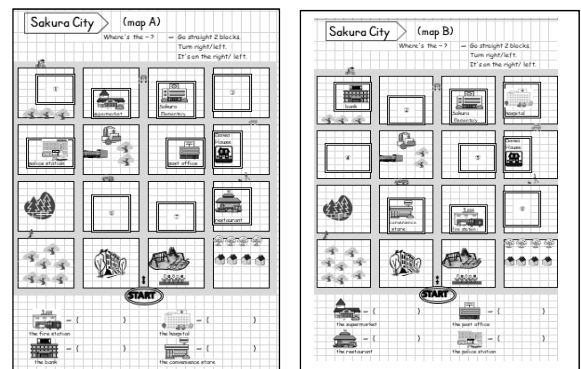


例えばよく行われる活動にインフォメーション・ギャップ (information gap) があるが、足りない情報を得るために会話の必然性があり、とても有効な活動である。このインフォメーション・ギャップはグループ活動として行うこともできるし、ペア活動や個人活動でもできる。[例①]は破れた部分が異なる時間割を3~4種類用意し、グループの中でたずねあって空白部分を埋めていくもの。[例②]は2種類の地図を用いて、ペアで道案内をしあって地図を埋めるもの。[例③]は一人一枚ずつゲームシートを持ち、(a)~(j)の人物がそれぞれどこにいるのかをクラスの中を聞いて回って埋めていくもの。同じインフォメーション・ギャップの活動でも違うレベルで行うことができる。子どもたちの習熟度に応じて、はじめはターゲットとなる表現がまだうまく言えない子どももグループの中で助けを受けながら活動し、自信がついてくるに従い、ペア活動、個人活動へと進めていけばよい。

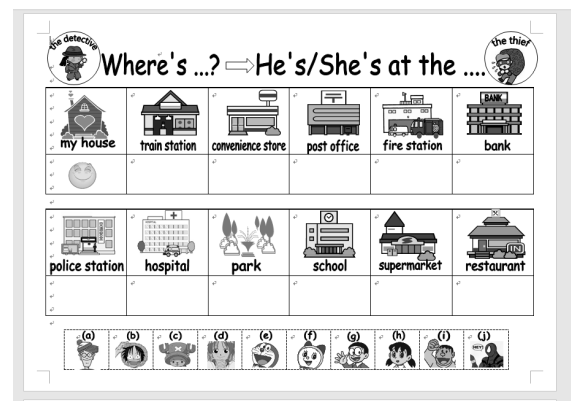
[例① インフォメーション・ギャップ (グループ)]



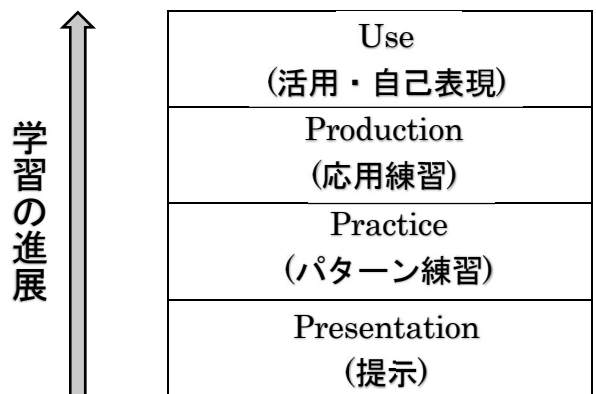
[例②インフォメーション・ギャップ (ペア)]



[例③インフォメーション・ギャップ (個人)]



また活動の内容としては、まずターゲットとなる言語材料を提示し、それをパターン練習し、さらに応用練習して、最終的にはそれを活用したり自己表現したりできるようになることを目標とする。次のように積み上げていくイメージである。



Step 1: Presentation (提示)

まずターゲットとなる言語材料を ALT と HRT の会話や黒板、フラッシュカードなどを使って導入するわけだが、必要な情報を絞って、子どもたちにわかりやすく提示したい。

Step 2: Practice (パターン練習)

QやAを入れ替えて、抵抗なく言えるように練習をする。比較的単純なゲームなどを使って、繰り返し発音する。単語や文の練習をするとき、子どもたちは機械的にオウム返ししていることがある。そうならないように視覚にも聴覚にも働きかけながら練習する工夫が必要である。

Step 3: Production (応用練習)

Q→Aがスムーズに言えるようになったら、応用練習をする。様々な活動が考えられるが、ここでは高学年向けの例を二つ挙げてみる。いずれも **What's your favorite ...?** を使ったものである。

【例① 仲間集め(Group Assembly)】

スポーツ、教科、食べ物を書いたカードを一人一枚ずつ配る。**What's your favorite sport? What's your favorite subject? What's your favorite food?** など聞いて回り、自分と同じカードを持っている人たち(Best Friends)を探し、指定された人数のグループを作るゲーム。



【例② 人物当てゲーム(Guessing Game)】

Ichiro, Jiro, Saburo, Shiro, Goro のいずれかに○されたカードを一枚ずつ持ち、相手を見つけてじゃんけんをして勝てば **What's your favorite sport?** など3つ質問ができる。その答えから相手がだれかを当てる。負けたら1つしか質問ができないので当たる確率は下がる。どの質問をするかもよく考えなければならないので、高学年向けの活動である。

What's your favorite ~? → It's ~.		favorite sport	favorite food	favorite subject	favorite TV show	favorite comic book
Ichiro				Mステ		
Jiro				Mステ		
Saburo				Mステ		
Shiro				はねとび		
Goro				はねとび		

ルール：じゃんけんで勝った人・・・3 Questions
じゃんけんで負けた人・・・1 Question

Step 4: Use (活用・自己表現)

上の二つの活動の例では、いずれも実際に自分の好きなものを答えるわけではなく、カードに書かれたスポーツや教科を答えるゲームである。Useの段階ではこのような仮定ではなく、実際に自分自身の好きなものを使って会話をする。例えばクラスメイトに好きなスポーツや教科をたずねあつて統計をとることもできるし、先生たちにインタビューをしてみることもできる。ふだんは仲の良い友達など限られた人たちとしか話さないことが多いと思われるが、英語を介してふだんは話をする事のないクラスメイトと思わぬコミュニケーションができることもある。このUseの段階では、学習した表現を活用してアクティブ・ラーニングをするわけである。このように学んだ表現を自分のものとして主体的に使う活動は、小学校英語の役割から考えれば最も重要なステップである。

○『読む』力をのばす取り組み

(1) フラッシュカードについて

「読む」ためにはまず文字に慣れる必要がある。例えばフラッシュカードに入れる単語ひとつをとっても、読みやすい位置、サイズ、フォントなど配慮が必要である。また低学年だからといって、絵だけのフラッシュカードを使うのではなく、必ず英語でその単語のつづりを示しておきたい。小さい子どもたちは絵を見てビジュアルにその単語の音と結びつけるだけでなく、無意識に単語のつづりも目に入れていて、なんとなく覚えていたりする。低学年や中学年ではわざわざ教えるわけではないが、常に文字を視界に入れておくことも大切である。

(2) フォントについて

フォントについても配慮が必要である。子どもたちは黒板やカードなどに書かれたつづりを、見た通りそのまま書こうとする。そこで、子どもたちの目に入るフォントは、書くときに使うフォントと同じにしておきたい。印刷向けの活字を使うと混乱してしまう。aやg,tなどの文字がその典型である。他にもpやqの縦棒が短く、第4線にとどいていないもの、uの縦棒がないものなどもある。大文字でもIの上下の横棒がないフォントもある。これらの欠点を避けるためにワークシートなどを作るときには Comic Sans

MS などのフォントを使う人が多いと思うが、これにも大文字の **G** や **Y** に難点がある。もう少し理想的なフォントはないものかと探し求めて **SF cartoonist hand** や **Print clearly** などに妥協点を見つけて落ち着いていたが、一緒に仕事をしていた ALT のひとりがパソコンの達人で、理想的なフォントがないのなら作ってしまえ、ということで、いくつかのパターンフォントを作ってくれた。さすが生まれたときからインターネットやパソコンのある環境の中で育ったデジタル・ネイティブ(Digital Natives) である。筆者のようにしょっちゅうパソコンの前で立ち往生しているデジタル・イミгранト(Digital Immigrants) とはわけが違う。そのうちのいくつかを以下に紹介しておく。

① [NESEP Print Straight q]

abcdefghijklmnop

② [NESEP Hand Straight q]

abcdefghijklmnop

③ [NESEP Print D Straight q]

abcdefghijklmnop

一番目が先に述べた欠点を補う、ペンマンシップにも使えるフォントである。②はその手書き風のやわらかいフォント。③はなぞり書きの練習用フォントである。文字の高さにも配慮してあるので、これを四線にのせて使えばライティングのワークシートに最適である。

(3) フォニックスについて

小学校英語にフォニックスを取り入れることには賛否がある。フォニックスの歴史は意外に短く、英語圏でも 1980 年代によく浸透し始めたそうなので、おそらく 30 歳以上の日本人でこの方法で学んだ人は少ないのではないかと。私自身大学で初めてフォニックスに出会った。中学校、高校ではたくさんの英単語を学んで、その経験から、新しい単語に出くわしたとき、おそらくこう発音するのだろう、という予測がつくようになった。言ってみれば帰納法的な学びである。フォニックスはこの工程が逆で、いろいろな単語に当

てはまるルールを先に学び、それを新しく出会った単語に適用していく演繹法といえるだろうか。例えば **fine, line, mine, nine, pine, vine, wine** などの単語を学ぶと つづりと発音の関係から **shine** はおそらく「シャイン」と発音するのだろうと予測がつく。これが前者である。それに対して「e で終わる単語ではその e の前に来る母音字の a, i, u, e, o はアルファベット読みをする。最後の e は発音しない」という『サイレント e』(silent e) のルールを学んで『shine は e で終わっているからその前の i は「イ」ではなく「アイ」と発音する。最後の e は発音しない。ということは「シネ」と読むのではなく「シャイン」と読むのだな」と理解するのが後者である。**base** は「バセ」ではなく「ベース」、**time** は「ティメ」ではなく「タイム」、**stone** は「ストネ」ではなく「ストウン」である。(カタカナ表記で発音に少し無理があるが) どちらの方法にも短所・長所がある。まず従来の方法だと一つの法則を見つけ出すのにそれなりの量のインプットが必要である。語学的なセンスも必要だろう。しかし、自分自身で導き出した法則は印象強く残るだろうし、前向きな学習姿勢ができるかもしれない。かたやフォニックスを使った学習では、効率的に単語の読み方を学ぶことができる。ただ、同じアルファベットの文字に『名前』と『音』が存在することに混乱する子どももいる。文字と音が一致する日本語にはない概念だから、当然といえば当然である。フォニックスを取り入れる場合には、指導者が基本のフォニックスをきちんと学んで、わかりやすく提示していくことが大切である。母国語を経験的に習得する過程とは異なり、外国語学習者が母国語を介し、文法やフォニックスのルールを使って効率的に学ぶことができるのはむしろメリットなのではないか。

(4) 絵本の活用

先に『聞く』力を伸ばす取り組みでも取り上げたが、絵本の活用は『読む』力を伸ばす取り組みでもある。音で聞いて英語のリズムやリフレインを楽しみ、今度はそれを文字と結びつけていくわけである。前出の Chicken Soup with Rice - A Book of Months - (Maurice Sendak) などは、なんとなく文字を頼りにして暗唱してしまう子どもも多かった。授業で英語の絵本を取り上げるのは、本物の良質な英語にふれるよい機会である。

○『書く』力をのばす取り組み

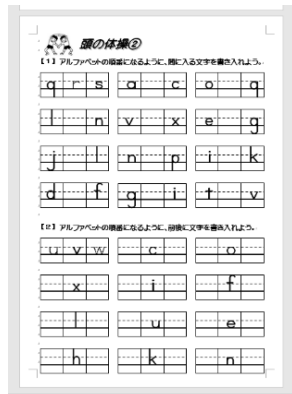
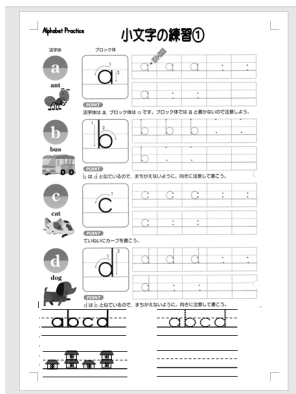
いろいろな形で英語にふれてくると、子どもたちは『書くこと』にも興味を示し始める。実際、小学校で教え始めた最初の年に、担任の先生から「子どもたちが自主勉強の題材によく英語のアルファベットや単語の練習をしてくるのだけれど、自主勉強ノートには英語用ノートのような四線がないので、どうも書き方があいまいで気になる」という相談を受け、自主勉強ノートに貼り付ける英語練習用の四線のあるシートを用意したことがある。書きたくてうずうずしている子どもたちも多かったのだ。新学習指導要領ではこのような児童の発達段階に合わせ、また、中学校へのつながりを考慮して、『書くこと』が導入されている。『書くこと』の指導で気を付けたいことや実践例を挙げてみる。

1. アルファベットを書く

『書く』活動は、まずアルファベットを正確に書くことから始めなければならない。間違いやすい文字 (b と d, p と q など) や文字の高さに注意を払わせながら、ワークシートを使って丁寧に練習させる。先に『読む』で述べたように、このとき使うフォントには配慮が必要である。アルファベットはすべての基本となるので、下記①～④の例のように様々な工夫を凝らしてしっかり定着させたい。

【例① 基本練習】

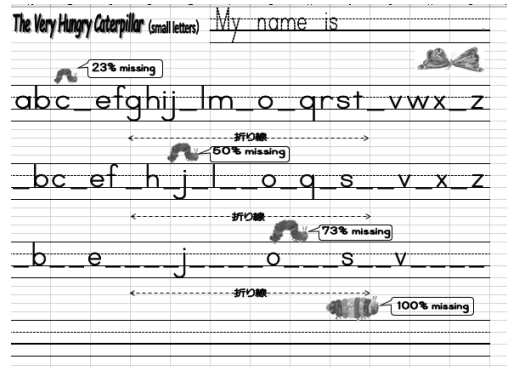
【例② 頭の体操】



【例③ 間違い探し】



【例④ 虫食いアルファベット】

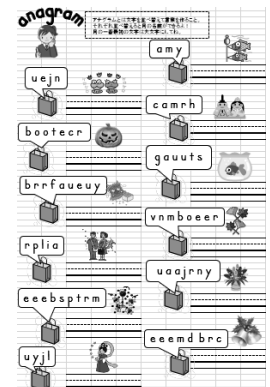
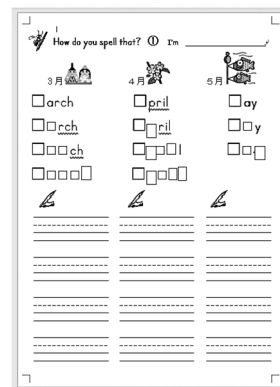


2. 単語を書く

例えば When's your birthday? → It's ... という表現を学習するとき、必ず月の言い方を覚えなければならないわけだが、音として覚えるだけでなく、文字も使って練習すれば相乗効果があるだろう。小学校では単語を覚えて書くことは求めているが、それでも音とつづりを結び付けてなんとなくわかる、というようにしておけば、それが中学校につながっていくだろう。『読む』ときにフォニックスを活用してつづりから読み方を推測したのとは反対に、今度は音を聞いてつづりを推測しながら『書く』わけである。ただ左のものを右に書き写す単純作業にならないように、穴埋めにした(例①)、アナグラム(例②)を使って文字の順番を考えながら書くようにしたり、様々な工夫が考えられる。

【例① 基本練習】

【例② アナグラム】



3. フレーズや文を書く

高学年では新しい表現を学んだら、その都度それを『書く』活動を取り入れていきたい。このとき、文の最初は大文字にするとか、単語と単語の間にスペースをあけるとか、文の最後にはピリオドかクエスチョンマークがくる、などの英文を書くときのルールを毎回確認しながら練習すれば、やがて定着していくだろう。学んだ表現が文字と結びつい

て、より記憶に残りやすくなるのではないだろうか。手順としては先にフレーズを書く練習をして、次の段階として文を書くようにすればスムーズに進められるのではないかと考えて実践してみた。子どもたちは本当に感性が豊かである。形容詞を学習した後に形容詞句を使ったミニチュアブック作りに取り組んだところ、シュールで面白い作品が続々登場した。

(児童の作品例)



6年生ではこれまでに学んだ表現を使ってプロフィールを書く授業を行った。これをさらに進めて、相手に伝える目的で『書く』ことに取り組んだのが、次にあげる手紙交換プロジェクトである。

4. 手紙交換プロジェクト

『書く』学習の総仕上げとして、市内の小学校6年生どうして手紙を交換する授業をおこなった。どの学校も同じカリキュラムで授業をしてきているので、これまでに学んだ「自分の性格」「好きな教科、スポーツ、食べ物」「誕生日」「将来の夢」「行ってみたい国」などの表現を使って手紙を書き、受け取った側の学校の子どもはそれに対する返事を書く、というプロジェクトである。学習の過程で言えば最終段階の活用・自己表現である。子どもたちは一字一字丁寧に手紙を書き、受け取った手紙を一生懸命読む。ふだん他の学校の子どもたちと接する機会はそう多くないので、想像を膨らませながらこのプロジェクトに取り組んでいた。実際に英語を介して知らない人とコミュニケーションがとれる、ということは貴重な経験である。企画は簡単ではないが、も

し相手が外国の小学生であれば、さらに興味深く発見の多い活動となるだろう。

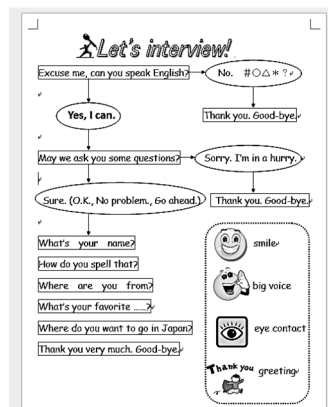
○統合型の取り組み

「聞く」「話す」「読む」「書く」といった技能は本来別々にあるのではなく、どのような活動をしていても常にいろいろな要素が絡み合っているものである。教室での様々な活動が練習試合とするならば、次にあげる二つの活動例は、これまでに学んだこれらすべての力を総合的に活かす、いわば実戦である。

(1) 修学旅行で訪日客にインタビュー

修学旅行先の奈良で、外国から観光に来ている人たちにインタビューをする計画を立てた。まずグループで話し合っ、どんな質問をするかを話し合い、誰が何を聞くかを決めた。どこの国から来たのか、好きな日本の食べ物は何か、日本でどこへ行ってみたいかなど、グループごとにいろいろな質問を考えた。そして他の先生方にもお願いして観光客の役をしてもらい、シミュレーションもした。英語が通じるとは限らないし、急いでいてインタビューに答えられない人もいるかもしれない。いろいろな場合を想定して練習を重ねた。

(Interview Flow Chart:インタビューの流れ)



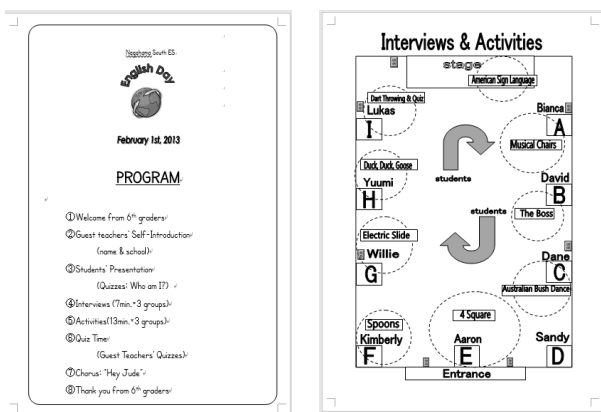
時間を割いてインタビューに答えてくれた人に、お礼に折り紙を渡そうとみんなで準備をした。失礼のないようにすること、ちゃんとお礼の気持ちを伝えることを確認して本番を迎えた。インフルエンザが流行したり天候が悪かったりした年は観光客が少なく、あまりインタビューができなかったこともある。しかし、概ね毎年各グループが少なくとも3~4人の観光客にインタビューができた。年によっては10人近くにインタビューしたグループもあった。報告会

をした年もある。スイスから来た人がいたとか、ドイツの人だったとか、答えが聞き取れず地図を見せて教えてもらったとか、広島へ行きたいといっていたなど、様々な学びがあったようだ。自分たちの話す英語が実際に通じて、相手の言っていることが分かったという喜びはなにものにも代えがたい経験である。

(2) English Day

市内の各学校の6年生たちは毎年 English Day を経験した。市内に勤務する ALT たちをゲストに招いてインタビューをしたり、ALT たちの出身国のあそびや文化を教えてもらったりするイベントである。あいさつや司会進行も、できるだけ子どもたちにしてもらおうようにした。

(English Day プログラムと配置図)



インタビューでは出身国や性格、誕生日、好きなスポーツや食べ物、日本で一番好きな場所、日本へ来た理由など各グループで考えた質問をする。子どもたちは真剣に答えを聞き取ってメモを取る。一方的な質問にならないように、ゲストには事前に質問返しをお願いしておくので、それにも一生懸命答える。さすがに ALT たちは慣れていたので、少しゆっくりとわかりやすく話してくれる。あちこちで笑い声が聞こえ、和やかな雰囲気インタビューが進む。次に ALT たちが用意してくれた様々な活動を一緒に楽しむ。外国の遊びではルールの説明に真剣に聞き入る姿が見られ、ルールを理解すると楽しそうに遊び始める。オーストラリアの伝統的なダンスを教えてもらうグループ、英語の手話を習うグループ、フェンシングやホッケーを体験するグループなどさまざまである。予定の時間が来て終了を告げると、あちこちで「えーっ!？」という声上がる。子どもたちもクイズなどの英語の出し物を企画してゲストに楽しんでもらったり、ゲストと一緒に”Let It Go” (アナと雪の女王) を歌

ったりもした。英語を介して多くのことを学ぶ貴重な機会である。

このイベントの後、ゲストにお礼状 (Thank You Card) を書いて感謝の気持ちを表す取り組みもした。どこの学校でもできるわけではないかもしれないが、このように実際に英語を使ってコミュニケーションをしたり、文化体験をしたりする機会があれば、子どもたちにとってはこの上ない動機づけになるだろう。

5. ひとりの英語学習者として

現代ほど語学に取り組むことが容易な時代はないのではないか。インターネットが普及し、わからないことがあれば何でもすぐに調べることができる。単語の発音がわからなければ音声で教えてくれる。スカイプを利用すれば海外の人とも顔を見ながら話ができる。語学番組を聞き逃してもストリーミングがある。テレビも二か国語放送で楽しむことができる。何と恵まれていることか。自分が学生の頃は語学といえばラジオの語学番組だった。雑音の混じるラジオに一生懸命に耳を傾けて聞き取ろうとしたものだ。今の便利さからは隔世の感がある。子どもたちにもやる気のタネをきちんと蒔いておきさえすれば、この恵まれた環境を味方にして自ら主体的に英語を学んでいくのではないかと思う。大人も同じである。小学校英語が始まるにあたって懸念されたことのひとつが、「いったい誰が教えるのか」ということであった。英語の専科の先生を置く学校もあるだろうし、ALT や地域の人材を活用する学校もあるだろうが、いまのところ多くは担任の先生である。小学校の担任の先生は英語の専門家ではない。しかしそれは他の教科についても同じで、担任の先生がすべての教科の専門家であるわけではない。しかし、担任の先生は子どもたちの発達段階や興味・関心について、誰よりもよく知っている。クラス・コントロールもできる。そのような強みを生かして、子どもたちと一緒に楽しみながら英語を学んでほしい。筆者も英語指導者であると同時に英語学習者のひとりである。常に知識をアップデートしながら学んでいく姿勢を失わないようにしたい。

6. おわりに

昨今、政治や経済の閉塞感から、自国中心主義を掲げる世

界のリーダーたちが増えている。まさに時代に逆行するような動きである。今日の世界はもはや自国の利益だけを優先しては立ち行かない。ことばを駆使して話し合いを重ねて問題を解決していくのが外交なのだろうが、その努力を放棄しているようにも見える。日本でも内向きの若者たちが増えているという。海外留学を希望する若者の数は年々減っており、かつてのように世界を見てやろうという熱気は感じられない。安全面の心配もあるのだろうが、外国語教育に携わる者としては少し寂しい。その国の気候風土の中でその国の人たちとふれあってみないとわからないこともあるから、ぜひ機会があれば異文化を体験してほしい。外から日本を見てほしい。いや、しかし、外国へ出ていなくても、今や日常生活の中で外国の人々と接する機会は格段に増えている。訪日客の数も年々増加しているし、今年には外国からの労働者の受け入れも国会で議論された。2020年には東京オリンピックが開催される。英語を母国語とする人も英語を母国語としない人もたくさん日本を訪れるだろう。これまで学んできた外国語が今こそコミュニケーションのツールとして役立つときではないだろうか。

【参考文献】

- 鳥飼久美子(2006)『危うし！小学校英語』文春新書
吉田研作・小川隆夫・東仁美(2017)『小学校英語
はじめる教科書』mpi 松香フォニックス
Bill Martin Jr./Eric Carle (1967)
Brown Bear, Brown Bear, What Do You See?
Maurice Sendak (1962)
Chicken Soup with Rice: A Book of Months
Hans Wilhelm (1985) I'll Always Love You
Shel Silverstein (1964) The Giving Tree